

ユニセフ・ネパール事務所

子どもの保護プログラム「児童労働と闘う」



©UNICEF Nepal/2012/Noorani

第 1 次報告書

Grant Number: SC141024

2016 年 2 月

unite for
children

unicef 

1. 概要

国内委員会	日本ユニセフ協会
支援者	神奈川県ユニセフ協会
番号	SC141024
支援分野	子どもの保護
プログラム費用(US\$)	\$ 106,954.52
プログラムでの支出(US\$)	\$ 37,570.37
残金(US\$)	\$ 69,284.15
報告期間	2015年1月1日 - 2015年12月31日
ユニセフ本部への報告日	2016年2月
国内委員会への報告日	2016年5月

2. プログラムの目的と期待される成果:

神奈川県ユニセフ協会によるご支援は、ネパールの開発プログラムの子どもの保護分野に寄与しています。

期待される成果1: 2017年までに 国の政策・法案・計画・予算・組織調整・監視(モニタリング)は、子どもや青少年・女性の生存・発展・保護・社会参加の権利を、人道的な場を含むすべての状況において平等を果たすために与えられること。

期待される成果2: 2017年までに、もっとも困難な地域にて、子どもや青少年、女性が人道的な立場を含むすべての状況において生存・発展・保護・社会参加するための質の高いサービスを一貫して与えられること。

期待される成果3: 2017年までに、重点地域において、子ども・青少年・女性・男性そしてすべての人権の義務を負う人たちが社会の変化に参画し、子どもや青少年・女性が人道的な場を含むすべての状況において生存・発展・保護・社会参加の権利を認めるために行動を起こすこと。

特に、支援の目的は児童労働などの子どもの劣悪な生活環境を改善するため、経済的搾取や虐待・保護の怠慢ないし拒否から子どもを守ることです。そのためにユニセフは、8か所の地方自治体¹を支援し、以下の5つに関連する分野に重点をおいた活動をしています。

1. 児童労働に関する情報管理の仕組み(データ収集、分析、普及など)
2. 児童労働の危険にさらされている子どもとその家族への社会復帰サービスの提供
3. 自治体や他の主な関係者の能力強化と制度強化
4. 行動変容のための社会的動員や広報
5. 市町村や関係機関の調整や監視(モニタリング)

¹ ユニセフはテライ地域の8つの自治体を支援し、児童労働と子どもの人身売買の削減と対応を実施しています。本プログラムへのご支援は、当該8の自治体の成果や活動に貢献しています。

3. 主な成果と関連事項

この報告期間、神奈川県ユニセフ協会からの資金は、子どもの保護プログラムに充てられました。2015年4月の大地震とそれに続く余震被害により、ユニセフ・ネパール事務所は通常の事業を一時停止し、緊急支援に集中しなければなりません(2015年4月25日から7月までの期間)。これにより、いくつかの事業実施に遅れが生じました。それに加え、テライ地域の多くの県での建物の倒壊、ネパールとインドの国境が閉鎖したことなどにより、2015年9月～12月の通常プログラム実施において、ユニセフとパートナー団体の活動に甚大な影響を与えました。2016年1月中旬から活動は少しずつ再開し、通常の事業ペースへと徐々に戻り始めています。

活動1:子どもの保護と児童労働における情報管理システム

ユニセフの支援を受け、対象の地方自治体は最新のガイドラインに沿って、収集したデータの更新・修正作業、調査フォームや調査方法の確認を継続的に実施しています。

活動2:児童労働の危険にさらされている子どもとその家族への社会復帰サービスの提供

報告期間に、支援対象となる8つの地方自治体において、最も過酷な形態の児童労働を強いられている629名の子どもたちが社会に復帰しました。社会福祉士によるフォローアップを受け、彼らへのケアは終了となります。解放された子どもたちは個々のニーズにあった様々なサービス(心理カウンセリング、教育支援、両親と雇用主との仲介など)を受けました。

ビラナガル市のパートナー団体は102件の新たな児童労働を見つけました。そのうちの80名の子どもがすでに社会福祉士によって計画・考案されたケアを受けています。また、学校でのエッセイコンテスト、啓発情報媒体(ポスター等)の印刷と配布、主な企業セクターに向けた提言会議の開催などの啓発活動を実施しました。

ポカラ市では、64名の子どもたちが両親のもとに戻ることができました。社会福祉士による定期的なフォローアップを受け、彼らへのケアは終了となります。

活動3:児童労働と闘う自治体の能力強化と制度強化

政府で働く40名の弁護士が、被害者の子どもたち、少年法、ダイバージョン、更生・復帰などに焦点を当てた子どもや女性のための司法の知識を高めました。

神奈川県ユニセフ協会からの支援によって、ユニセフは、裁判官・裁判所職員・政府の弁護士・警察官・被告者側法律家といった少年少女の裁判を含む領域の専門知識やスキル・行動・能力強化を目指す人たちに向けた子どものための司法の研修教材開発に寄与しました。

これによって、子どもの人権やジェンダーの問題、修復的司法、ダイバージョンや留置刑の代替のものといったことに重点をおいた彼らの仕事に、基本的人権へのアプローチをする能力が高められました。

この教材(マニュアル)をもとに、50名の裁判官・裁判所職員・政府の弁護士・警察官が研修を受けました。さらに、被害者にやさしい部屋(victim friendly rooms)が20か所の県法律事務所に開設されました。この部屋の開設により、被害者が司法へアクセスしやすくなりました。

4. 使われた金額

重点分野・活動内容	支出 (US\$)
県の児童福祉システムの強化	37,570.37
合計	37,570.37

5. 課題

本事業は4月25日と5月12日の地震の影響により遅れが生じています。地震によって様々な活動実施が遅れ、政府はより緊急なニーズと優先順位の高いものに対応を追われました。国内で人道支援の先導に立つ団体の一つであるユニセフは、緊急援助の最前線にいました。国内の多くの地域が直接的な被害を受けず、通常プログラムは継続することができる状態であったものの、人的資源において制限がありました。

結果として、震災後の緊急支援を行った3か月の間、いくつかの活動は一時的に遅れました。政府主導の事業報告にも遅れが見られました。通常プログラムは2015年8月から徐々に再開され、緊急・復興援助と並行して実施されています。

2015年8月～12月の間、ユニセフの活動重点地域であるテライ地区で政治的不安が広がりました。このこととインドとの国境封鎖はユニセフとパートナー団体の2015年9月～12月の通常プログラムの実施に多大な影響を及ぼしました。2016年1月中旬から、活動は徐々に再開しています。

6. 今後の計画

下記の事項は2016年の支援計画における児童労働や子どもの保護に関する重点課題です。

- 地方自治体の能力強化(より良い計画・実施・自治体のもつ財源のモニタリング)
- ネパール政府による児童労働撲滅の戦略に沿った新しい行動計画の策定への支援
- パートナーのNGOと地方自治体が児童労働のデータ収集・編集・分析を改善するための情報管理システムの支援

7. 謝辞

ユニセフは、ネパールの子どもと女性に対する支援を継続している神奈川県ユニセフ協会に対して感謝申し上げます。

付録:ネパールの子どもの物語

ケース1: マニシャの話～児童労働者から学生へ

14歳のマニシャは元家事労働者です。彼女の家はとても貧しく、父親が彼女を雇い主のもとへ初めて送り出したとき、彼女はわずか7歳でした。しかし、彼女が労働者として送り出されたのは、貧しさだけではなく、彼女の兄は家族と暮らし、学校に通っているという性別による差別も原因です。「家事労働者」とは、雇い主の家庭で働く子どもたちと国際的に定義されます。政府はこれを児童労働の中で最も悪質だと主張していますが、このような労働者はネパールにたくさんいるのです。

1年半働いた後、マニシャの父は次の雇い主へ娘を送りました。この雇い主は表面的には子どもを学校へ通わせることに賛成していましたが、マニシャは勉強に興味を抱いても定期的に学校へ行くことはできませんでした。なぜならば、彼女にはやらなければならない日々の仕事がたくさんあったからです。

マニシャは家事労働者として、多くの様々な雑用をさせられました。料理・食器洗い・水汲み・洗濯・掃除などです。これだけの仕事をして、食事と滞在場所だけで賃金は支給されませんでした。これは家事労働者の中では普通のことです。これらの重労働に加え、マニシャは雇い主の妻から言葉や身体を使ったいじめを受けました。あるとき、彼女は調理器具でマニシャの手を暴力的に叩き、骨折させたのです。マニシャは強い痛みを感じましたが、両親には何も話さないよう強要され、適切な治療を受けられませんでした。「言葉の暴力や身体的な暴力は日常茶飯事だったので、誰も私の痛みを気にしなかったわ。」マニシャは語り、今でも骨折した手を使うと慢性的な痛みを感じると言います。

ある日、マニシャはユニセフが支援するNGOのソーシャルワーカー(社会福祉士)に会いに来ました。このソーシャルワーカーは、教育の重要性と児童労働の弊害についてカウンセリングを行いました。さらに彼女はマニシャの両親とも話し、マニシャが暴力や搾取から逃れるために家族と暮らすことを推奨しました。何度か面会を行って家庭の実態を評価してから、このNGOはマニシャが学校へ通えるように支援を行い、マニシャを家族のもとへ戻しました。

それに加え、マニシャの両親はユニセフと現地のNGOから、1日3ドル程稼げる小さな商店を営むための支援を受けました。マニシャの父親も、家計を支えるため、地元の家具工場で働き始めました。マニシャは現在、家族と共に暮らしながら地元の高校に定期的に通っており、先生になることが将来の目標だと話しています。



14歳のマニシャ



ユニセフの支援で両親が始めた店に立つマニシャ

ケース2: アナプの成功への道のり～路上から家族との暮らしへ～

アナプは路上生活を経て、家族と再び暮らせるようになった15歳の男の子です。彼の家族は、伝統的に最も低い立場であり、差別を受けてきたダリットという集団に属しているため、彼は幼少期に困難な状況を強いられました。さらに、アナプの母親は貧困のため、より多く稼げる外国へ一時的に出稼ぎをしていました。

アナプが路上生活をしていた他の理由は、アルコール依存症により酒に酔って息子を殴る父親との関係がうまくいかなかったことです。アナプはたった14歳で家を出て、お金を稼ぐためにガラクタを集め、路上生活を始めました。彼は舗装道路や市場の前など様々な公共の場所で夜を過ごしていました。路上で過ごしているとき、生きるためにどんなことでもやりました。多くの路上生活を送る子どもたちにとって一般的な喫煙や飲酒が習慣となるように、彼は大量の麻薬を投与していました。特に路上生活を送る子どもたちは犯罪と同様に性的暴力やHIV/エイズなどのリスクをさらされやすく、悪徳商人や麻薬売買人、ブローカーにとってそれらの子どもたちは労働や性的な目的のために利用する対象となりやすいのです。

アナプはユニセフのパートナーであるNGOによって運営されている施設を訪問するまで、約1年間を路上で過ごしました。アナプは定期的に施設を訪れ、心理カウンセリングや健康・衛生の情報などの様々なサービスを受けました。さらに、彼は同年代の子どもたちとゲームやスポーツ、TVを見るなど施設の様々なレクリエーション活動に参加しました。そして、施設に来てから5か月が経つと、アナプは家に戻る自信を十分に持てるようになりました。

施設の職員はアナプが家族に馴染めるよう家庭を訪問し、また海外で厳しい3年間を過ごした母親自身も家庭に戻れるよう母親とも話をしました。彼女は厳しい環境下で働いてきましたが、残念なことに金銭的な報酬は彼女に外国での職場を提供したブローカーに搾取されていました。加えて、父親と母親両者に心理カウンセリングを行いました。

アナプの母親は自身の息子を守りたいという気持ちが芽生え、ユニセフの支援で行われた路上生活から家庭に戻る子どもをもつ家族のための研修に、5日間参加しました。その結果、アナプの母親は、手押し車で季節限定の物を売る小規模な事業を興すことを選択しました。彼女には手押し車と事業を始めるための約100ドルが支給されました。

現在、アナプの母親の事業は軌道にのり、一日に平均7～8ドルを稼いでいます。と同時に、アナプは地元の学校に通い、上位の成績をあげています。ユニセフの事業は、アナプに教育資材を提供することでも貢献しています。



アナプと母親の手押し車



6

ユニセフが支援するパートナー団体によって運営されている保護施設でのアナプ

ケース3: 取り戻したアシャの生活と尊厳

これはダン地方に暮らす14歳の女の子アシャの物語です。アシャは、子どもらしく暮らす生活を取り戻す前、家事労働者として幼少期の4年間を過ごしました。

アシャの両親は貧しい農民で、アシャやアシャの2人の妹の学費を払う余裕はありませんでした。若い女の子が家事労働者として働くという考えが一般的な文化のため、アシャは都市、カトマンズで児童労働を強いられました。その時アシャはたった9歳でした。2年間、雇主の家で、カゴいっぱい衣服の洗濯や床磨き、食事の準備等をしました。彼女の一日は、朝早くに始まり、夜遅くに終わりました。恐怖や不安、孤独で彼女は家に帰ること、学校へ行くことを思い焦がれました。

2年後、アシャが一度家に帰った時に、家にいたいと両親に頼みました。しかし、家族の経済的理由のために彼女の父親は異なる雇主の所でアシャを働かせました。そこは地方の医者の家でした。新しい雇主は、アシャをれんがの焼釜で働かせました。そこで11歳の小さな女の子の過酷な労働生活が始まりました。アシャは、とても熱い環境で過酷な労働をしなければなりません。また、稼ぐために他の労働者と競い合わなければなりません。彼女が稼いだお金は父親に共有されます。「私は悲しくて、たくさん泣きました。」とアシャは言います。

幸い、この物語はここで終わりません。ユニセフやゴラヒの地方自治体、地元のNGOの支援のおかげでアシャは家族のもとに戻りました。NGOは雇主と同じくらいアシャや家族にも会い、アシャが家に戻れるように、計画を立て、調査を行いました。それに加え、アシャと家族は、カウンセリングやソーシャルワーカー(社会福祉士)の訪問を受けました。アシャが家に戻るための鍵となる1つの要素は、家族の児童労働に対する否定的な考えを大きくすることです。アシャは、学用品や制服の支援を受けました。

今、アシャは母親の家事を手伝っていますが、定期的に学校に通っています。学校に通うことで自分の尊厳が戻ったとアシャは言います。彼女は、ユニセフが支援を行う学校を卒業した後、地元の学校で5年生として勉強しています。そして、最も大切なことは、彼女は今家族のもとに戻ったことです。幸運にも、若い女の子は子どもの生活を取り戻しました。今、彼女の夢は高等教育を受けることです。



© UNICEF Nepal

貧困や「若い女の子は家事労働するものだ」という考え方が蔓延している社会的背景によって、アシャのような女の子が9歳という年齢で児童労働に搾取される。